

PhilSci Newsletters No. 6

Editor Ucci Uccini

ダーウィンの生誕二百年がそろそろ迫ってきた。二月十二日が彼の誕生日である。この生誕二百年に向けてダーウィンの本を執筆中だが、誕生日までの完成は無理となってきたので、すでに書き終わった一部から、わたしの解釈としてオリジナルな部分を選んで一足先にお目につけよう。これまでのニューズレターでも折に触れて示唆してきたことだが、この際、はっきりと、明示的に主張しておく。わたしは哲学者なので、歴史的な時系列や、文献考証を決して無視するわけではないが、「これが本質だ」と考えることをズバリ指摘することが使命だと考える。

Darwin's bicentenary is coming. I am writing a book on Darwin for this, and I will show a part of this book in the following. Being a philosopher, I take it my duty to point out, straightforwardly, the essence of the Darwinian ideas, although this does not mean I disregard the historical time line and documentation.

ダーウィンの結婚と自然淘汰説

1. 転成説のノートブック

ダーウィンは、いかにして自然淘汰説と妻とをほぼ同時に手に入れたか？それは1838年のことである。ダーウィンにとっては二十代最後の年、ビーグル号関係の書物、地質学会の仕事、そして密かに始めた種の転成説の資料集めや考察で、どんどんノートが増えて忙殺されている時期である。ダーウィンの『ノートブック』は多数残されており、解読や復元作業が多くの研究者によって進められ、1987年には、決定版とも言える形で出版された (*Notebooks*)。簡単に解説しておけば、最初の『赤いノートブック』はビーグル号航海中に書き始められたが、後半は帰国後に書かれた項目が入り、地質学に関する話題のほか、種の問題に関する記述が始まる。1837年に書き始められた『ノートブックA』は、やはり地質学と種問題が入り交じった内容で、『赤いノートブック』に続く。これに対し、『ノートブックB』は種の転成説に絞り込まれた内容で、『ノートブックA』の少し後、1837年の7月頃に書き始められた。そして、C、D、Eと同じ路線のノートブックが続く。他方、1838年の夏頃、人間や動物の心的活動、感情表現などの話題に関する『ノートブックM』が開かれ、この路線は『ノートブックN』へと引き継がれる。これらのノートブックのほか、バラバラの紙に書かれた一群の覚え書きが「古い無用のノート」と略称されてダーウィン自身によってひとまとめにされている。こういったノートの内容は、『種の起源』を初め、ダーウィンの後の著作で練り上げられ、展開されていくのである。

2. 自然淘汰の原理

さて、当面話題を自然淘汰説に絞ることにしよう。ロバート・マルサスの『人

口論』を読んで自然淘汰説がひらめいたという定説は、前述の『ノートブック』などの研究によってすでに十分すぎるほどの証拠がある。38年の9月終わりから10月初めにかけて『人口論』読み、人間の繁殖率（指数関数的）と食料の増加率（算術的）の大きなギャップにもかかわらず、人口がほぼ一定だということから、生存には厳しい競争があり、人口の増加には大きなチェックがかかっているはずだ、というくだりが、すでにいろいろな考察で準備のできていたダーウィンにヒラメキを与えたわけである。これを生物界に適用すればどうだ？生き残る個体と死に絶える個体にはどんな差があるのだろうか。多くの個体を集めた統計的な話として、生存率の差が適応を生み出すはずではないか！生存に有利な形質を備えた個体が生き残りやすく、その有利な形質が長い間には種の大多数を占めるはずだ。これが種の変化を支配する法則なのだ。遂に、ダーウィンが構想した転成説の核となる理論が姿を見せたのだ。

これに先立ち、ダーウィンはスコットランドで「グレンロイの平行道」と呼ばれる珍しい地形の調査に出かけ、自信満々で海岸の隆起説という、（南米アンドスの隆起説に続く）二匹目のどじょうを捕まえたつもりになっていた。しかし、こちらは、しばらく後に無惨な失敗に終わるのである。

3. 結婚の損得勘定

こういった過程の中で、三十歳目前のダーウィンは結婚を考え始める。後に、「生涯にわたる体調不良や病に悩まされた」と言い立てるダーウィンだが、その言葉とは裏腹に、実に10人もの子供をもうけたことから考えると、相当精力絶倫だったと推測するのが妥当だろう。女性に対する関心がなかったはずはない。そして、几帳面な彼らしく、「結婚の損得勘定表」まで作って考察する。ただし、これとねらいをつけた相手がそのときはっきりといたわけではなからう。何しろ、ビーグル号航海の前にダーウィンのぼせていた相手は、ファニー・オーエンという、近所の大地主の娘で、彼女が遂に結婚したということを姉から航海中に知らされて、彼は涙したはずなのだ。後に妻となるエマ・ウェッジウッドとは、親戚づきあいでも親しくしたことは事実であるが、ロマンスの相手としては、決して候補に入らなかったのである。航海から帰国した後も、ウェッジウッドの屋敷や、1838年にロンドンのヘンズリー・ウェッジウッド

(エマの兄)の家でちょっと顔を合わせた程度で、ほとんど会っていない。むしろ、ライエル夫人の妹たち、ホーナー家の数人の娘たちのいずれかをダーウィンとめあわせたいと、親のレナード・ホーナーと夫人、あるいはライエル夫人たちがお膳立てをしていたらしいのである (Browne 1995, 356-8)。

ダーウィンは、この時期、敬遠していた父親と相談し、「生活に困らないだけの遺産はあるぞ」と保証をもらっただけでなく、貴重な忠告まで受ける。「自分の宗教的信条については、妻となる女性に決して告げてはならん」と。なぜなら、彼女が信心深ければ、「夫の救済」について余計な心配をかけ、苦しませることになるからだ。この父親、ビーグル号航海中にダーウィンの調査費用として莫大な「投資」をしただけでなく、相当洞察力のあるできた親だ。で、チャールズはといえば、生活の保障が得られたので、相手の物色を始める。すでに述べたように、ロンドンで、ライエルの紹介でダーウィンが出入りしていたホーナー家(ライエル夫人の実家)には、年頃の娘が何人かいて、いずれも才能豊かだったし、ダーウィンは、兄エラズマスのところへ出入りしていた女傑(作家)ハリエット・マーティノーも嫌いではなかった。しかし、妻となると、知的な才能はいらないし、パーティのホステス役をするような才覚もいらない(それには、兄のエラズマスがうってつけ)。できるだけ、自分のじゃまをしないような女がいい。となると?母方のウェッジウッドだ!とすると、一番下のエマしかいない!わずかに自分より年上だが、幸い、性格のいい従姉だ。こうしてねらいをつけ、7月にメアのウェッジウッド屋敷を訪れる。二人きりでのおしゃべりに持ち込んだが、感触はよくわからない。そうすると、後は押しの手のはずだが、優柔不断なダーウィンは先に進めず、不安を紛らわすためにまた仕事と研究に戻る。その、ぐずぐずしている間にマルサスを読むことになるのだ。

4. フィアンセ、エマの直観

彼が手に入れた新しい理論は神をますます不要とするので、信仰の厚いエマに求婚するのは頭の痛いことになるのだが、彼は遂に勇気をふるって11月初めに再びメアを訪れる。突然の求婚で、どちらもぎこちないが、エマは受諾する。ダーウィンの父親のドクターにとっても、これは歓迎すべき話だ。なぜな

ら、自分の財産も、ウェッジウッドの財産も分散せずに済むからだ。しかし、正直が取り柄のダーウィンは、父親の忠告に逆らって、自分の不信心を後にエマに打ち明けてしまう。しかし、エマの方もダーウィンの本質をよく見ていたようだ。ダーウィンは、「結婚の損得勘定表」を作るほどの分析的知性の持ち主で、結婚後の収支を綿密に記録した家計簿の帳尻合わせにも熱心に取り組み、若いときから動植物の採集記録、狩りの成果の記録まできちんと残さなければ気が済まないような人物である。しかし、万事打算に走るような人物ではなく、人間的な誠実さと暖かさもち合わせていた。それを十分わかった上で、エマは結婚を決めたのであろう。この点は、半ば冗談めかしてはいるが、結婚する直前にダーウィンに宛てた次のような手紙（1839年1月23日、CCD, 2.169-170）からよくわかる。

あなたが自分の心を説明する仕方を見ていると、わたしのこともきっと例の属（よくわからないけど、類人猿属かしら）の一標本としてしか見ないのでしょうね。あなたはわたしについて学説をつくり、わたしがすねたり怒ったりしたら、「これは何を証明するのだろうか」としか考えないのでしょ。たいそう立派な哲学的考察ですこと。

この文章を見る限り、エマはすでに結婚前からダーウィンの進化論者としてのスタンスを（直観的に）よく理解していたことになる。しかし、彼女は、ダーウィンが嘘をつけないほど誠実で温かい人柄であることも十分に理解していたのだ。この手紙は、ダーウィンの家庭生活、とくに夭折した長女アニーとダーウィンの関係に焦点を合わせたランドール・ケインズ（ダーウィンの子孫の一人）の伝記『ダーウィンと家族の絆』で引用されている。ケインズの解釈は、こういう風に冗談めかすと、将来の夫との宗教的信条の違いに関わるエマの不安が少しは和らぐ、というものだ。それを否定する必要はないが、その「冗談」で前提されているエマの直観的洞察とエマの聡明さにもっと注意を払ってしかるべきだろう。

5. ミツバチの本能と人間の道徳

自然淘汰の原理を発見したのとほぼ同じ頃、ダーウィンはもう一つのめざま

しい洞察を得ていた。この洞察は、功成り名を遂げた後になって、『人間の由来』（1871年）で本格的に展開されることになる、人間の道德感覚に関するもの。しかし、その洞察が書かれた日付に注目しなければならない。一八三八年十月二日、マルサスを読んでいる最中で、同じ日付の別の項目には、はっきりとマルサスに対する言及がある（*Notebooks*, 609）。

道德家の二つのグループ。一方は、われわれの生活の規則は最大幸福を生み出すはずだという。——他方は、われわれが道德感覚を持つという。——しかし、私の見解は両者を結合し、それらがほとんど等しいことを示す。最大の善を生み出してきたもの、あるいはむしろそもそも善のために必要であったものは、本能的な道德感覚である（そして、このことのみが、なぜわれわれの道德感覚が復讐を指示するのかを説明する）。幸福のための規則を判断するには、われわれははるかな将来と一般的な行為を見なければならない——なぜなら、もちろん、その規則ははるかな過去にわれわれの善にとって一般に最善であったものの結果だからである——（われわれが将来を見られるよりも、もっと遠くまで過去に遡る。だからわれわれの規則はときには言うことがむずかしいかもしれない）。ミツバチの巣がミツバチの本能なしでは存続できないのと同様、社会は道德感覚がなければ存続しえない。（内井訳。太字はダーウィンの強調。ダーウィンの挿入や余白への書き込み等を示す記号は、煩雑になるのですべて省いた。）

前の方がわかりにくいという読者は、最後の文章に注目していただきたい——「ミツバチの巣がミツバチの本能なしでは存続できないのと同様、社会は道德感覚がなければ存続しえない。」この文章が、彼の洞察を簡明に表現している。ダーウィンの航海中に決定的な影響を与えたライエルが、種の転成説にあくまでも反対した一つの理由は、人間が唯一の道德的動物で、自然界のほかの種には「道德」の要素がどこにも見つからないということだった。ライエルは、この見解を『種の起源』が出たあとも、晩年まで引きずるのである（Uccini 2008）。それほどまでにライエルを悩ませた問題を、若い、結婚前のダーウィンは、実にやすやすと解消させてしまう。すなわち、ミツバチが本能によって彼らの社会を維持しているのと同様に、人間は道德によって人間の社会を維持していると考えればいいのだ。ライエルが人間の尊厳のもとと見なしたものを、ダーウ

インはいとも簡単に自然界の中へ投げもどし、ミツバチの本能と人間の道徳を「機能」に着目してつないでしまうのだ。しかも、引用文全体を見てもらえばわかるように、ダーウィンの得意満面の様子さえうかがえる。「道徳」に対するダーウィンのスタンスは、ライエルのそれとまったく異なり、道徳を「重荷」でも何でもなし、自然現象の一部として位置づけし直すという発想の転換を図るのだ。これは、この時代にあってはまさに革命的であることを強調しておきたい。

少々難解な前半部分は、ダーウィンがこの時期すでに道徳哲学（倫理学）をかなり勉強していたことを示している。道徳家の第一のグループとは、ベンサムに代表される功利主義学説を指す。要するに、なすべき行為を決めるには、その行為からもたらされる結果を考慮すべきで、道徳的行為の究極的な目的は人々の幸福にあるという考え方である。第二のグループは、道徳感覚説、別の呼び方では直観主義とも呼ばれることになる学派を指している。要するに、善悪を見分けるとか、不正をなしたときに良心の呵責を感じるというのは、特有の感覚、直観に由来するという学説である。これら二つの学派を分類するのは、十九世紀では一般的に認められていた方策である。しかし、それにしても、種の転成説を展開するのに、いったいなぜ道徳哲学を勉強したのだろうか。こういう疑問が読者に浮かぶだろう。わたしの推理では、すでに述べたように、ビーグル号航海中に熱心に読んだライエルの『地質学原理』が背景にあったと思う。尊敬するライエルが転成説に反対した理由を、ダーウィンが無視できるわけはなかったはずだ。

ダーウィンは、もちろん、自分のこのような見解を、功成り名を遂げるまでなかなか公開しなかった。しかし、彼は、おそらく未開フェーゴ人に出会うというショッキングな経験のおかげもあって、科学者としてキャリアを始めた時点でこのスタンスをすでに獲得し、ライエルの障害物を飛び越えてしまっていたのだ。「自然淘汰説」のヒラメキ以上に、おそらくこちらの飛躍の方がダーウィンにとって本質的だったというのがわたしの解釈である。その傍証として、同じ自然淘汰の原理に到達したウォレスは、人間の進化に関してやがてダーウィンと袂を分かつことになることを挙げておきたい。ウォレスはダーウィンのスタンスを共有できなかったのである。

文献

- The Correspondence of Charles Darwin (CCD)*, Cambridge University Press, 1985-
Barrett, P. H. et al. eds. (1987) *Charles Darwin's Notebooks, 1836-1844*, Cambridge
University Press. Abbreviated as *Notebooks*.
- Browne, J. (1995) *Charles Darwin: Voyaging*, Pimlico.
- Keynes, R. (2001) *Annie's Box: Charles Darwin, his Daughter and Human Evolution*,
Fourth Estate. (邦訳『ダーウィンと家族の絆』 白日社)
- Uccini, U. (2008) "Lyell's *Antiquity*", *PhilSci Newsletter* No. 5.
- 内井惣七 (1996) 『進化論と倫理』 世界思想社